

バス利用者対話集会における拡大型良循環サイクルの展開

～地方公共交通の課題解決に向けた住民主体の持続的な活動をめざして～



株式会社豊田中央研究所 社会システム研究領域
トヨタ自動車株式会社 未来創生センター

牧野玲子、日高健、若尾真里
佐多宏太



1. 背景、目的

地方都市では、公共交通利用者減少に伴い需要の低迷が深刻な課題となっている。

めざす姿：

＜持続可能な公共交通へ＞

経済性や利便性に留まらず、住民個々の主観的な生活満足度の向上や、地域生活に即した多様なサービスの充実が求められる。

＜地域住民主体の活動へ＞

地域住民が主体となり、各地域の特性に応じた生活支援機能や交通サービスの在り方を検討する必要がある。

＜本研究の目的＞

経済開発協力機構（OECD）が提唱する当事者性醸成手法「**AARサイクル**」および社会教育現場での実践に基づく知見を参考に、「**拡大型良循環サイクル**」を設定

このサイクルを基盤として、バス利用者との対話集会を実施し、住民主体の議論および地域の実情に即した公共交通サービスの在り方を検討

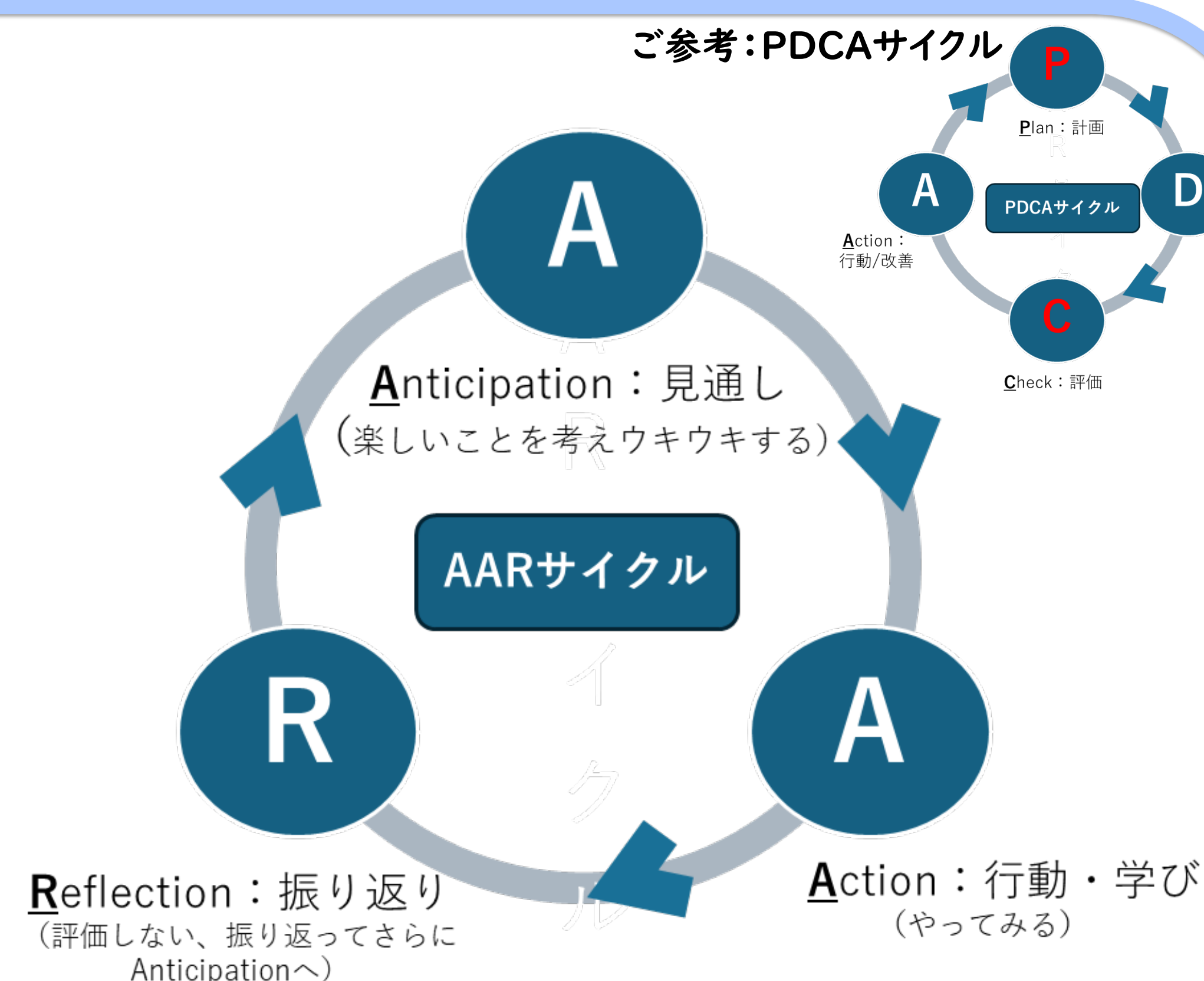


図1. 経済開発協力機構（OECD）や社会教育現場で実践されているAARサイクル

2. バス対話集会での拡大型良循環サイクル展開

1) 対話集会開催概要

バス乗り込み調査時に、対話集会への参加表明をした住民対象の集会にて「**拡大型良循環サイクル**」を展開（表1）

↓
裾野市内循環線の路線／時刻改定と岩波循環線廃止等において、地域住民の納得感のある再編につなげていく

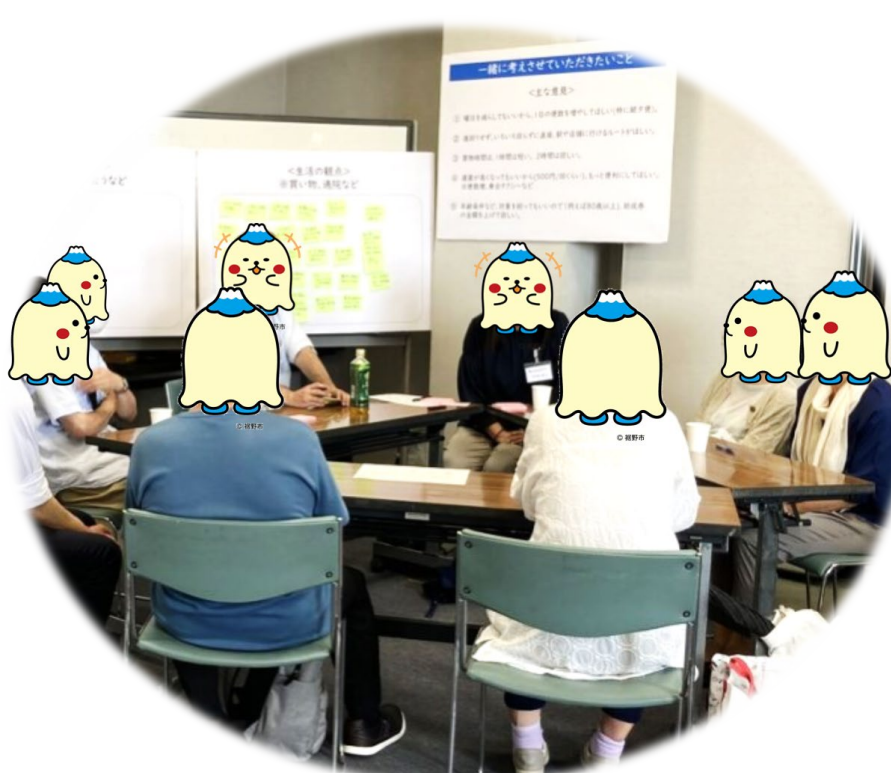


図2. 対話集会の様子

表1. 対話集会の開催概要

	実施日時	表主な話題	参加者数
第1回	2023年8月	自己紹介、現状バス路線課題等	26
第2回	2023年12月	路線再編案への意見等	18
第3回	2024年5月	試験運行便に対する意見等	20

2) 対話集会での拡大型良循環サイクル

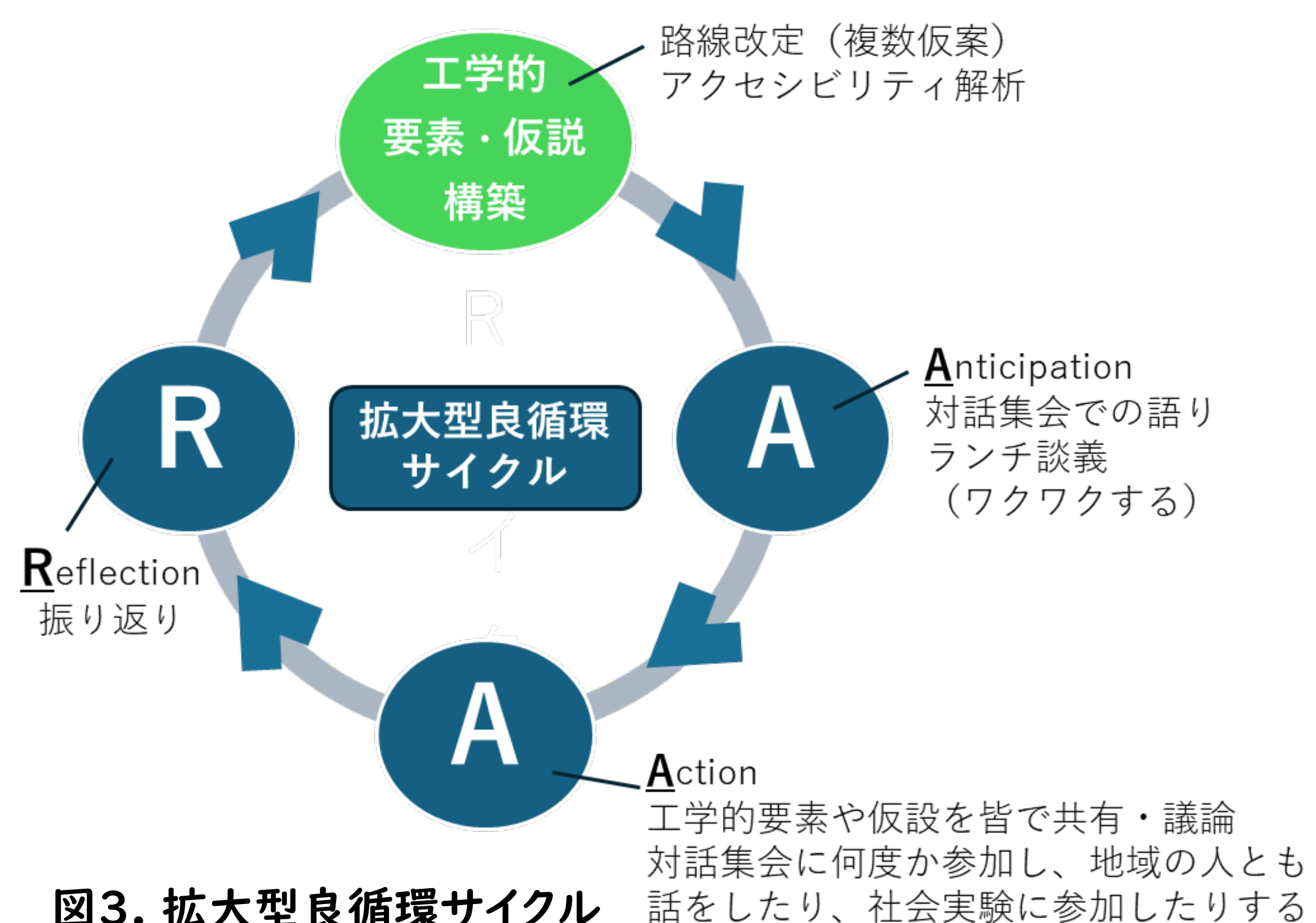


図3. 拡大型良循環サイクル

3. 結果

1) 参加者アンケート結果

- すべての対話集会に参加した13名は、アンケート結果に「楽しい」といったコメントがあった。
- 第1回はバス利用者としての受け身の立場だったが、第2、3回はバスを楽しむ仲間意識が醸成された（主体的な立場へと変化）。
- 第3回には、「他の人にも楽しんでほしい」、「バスを知ってほしい」といった他者への働きかけ発言が見られた（利他的な発言）。

2) 対話集会での発話つながり解析結果

- 発話類似度ネットワーク解析による参加者の立ち位置分析

→第1回は、比較的ファシリテータとのつながりが多い（図4の青色）
→第2回、3回は、自分自身の発話や他のメンバとのつながりが増加（第2回赤色、第3回黄色を図4に示す）

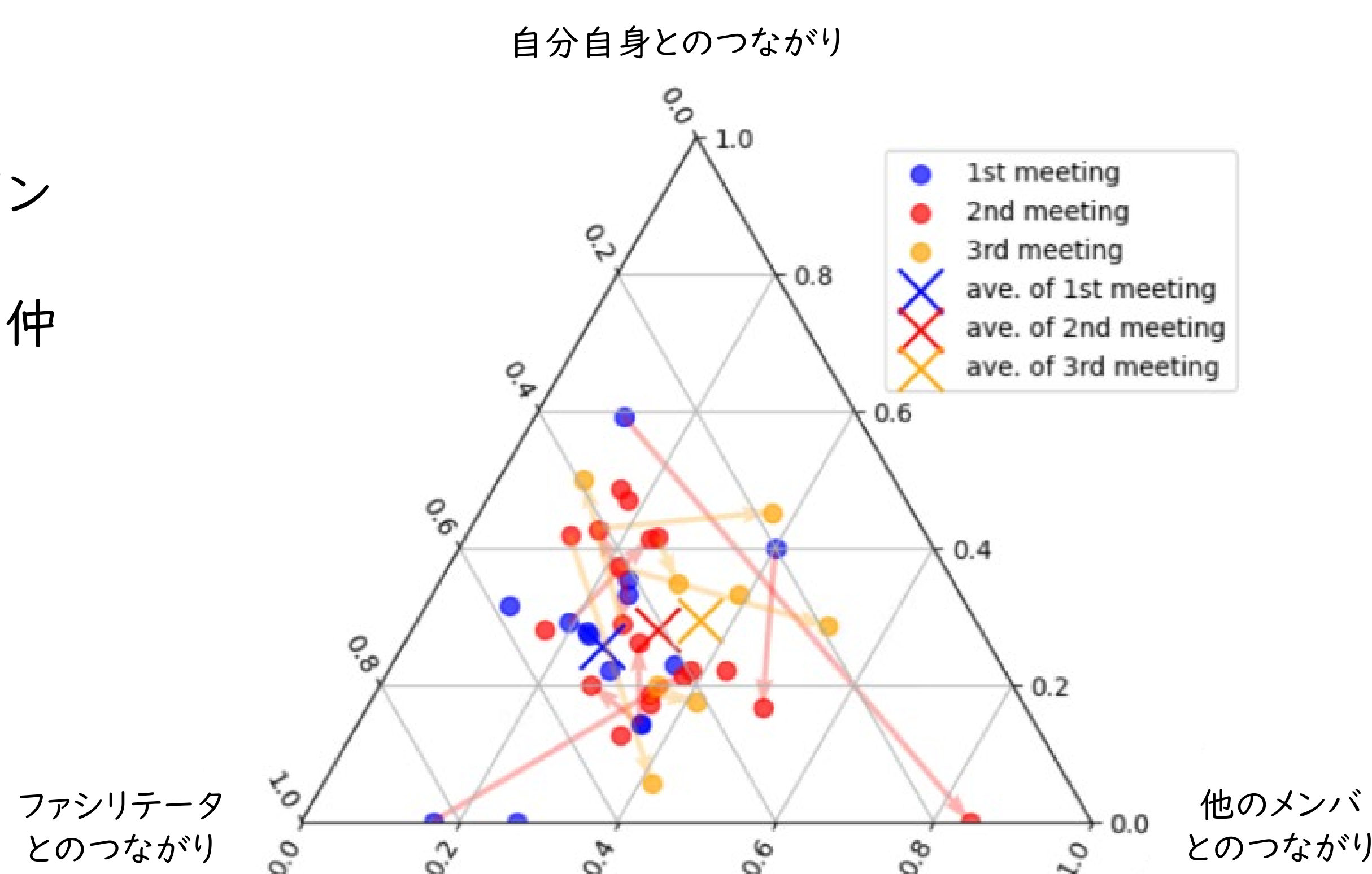


図4. 参加者ごとの発話のつながり割合

4. まとめ

- 経済開発協力機構（OECD）や社会教育現場の知見を参考に「**拡大型良循環サイクル**」を設定し、対話集会に展開した。
- 対話の場におけるメンバ間のつながりの複雑化や発話者の主体性醸成につながる可能性が示唆された。

→ 他地域にも展開可能なプロセスとしての波及効果が期待される。

謝辞 本研究の遂行にあたり、静岡県裾野市、対話集会に参加してくださった方々、矢崎総業株式会社、株式会社三ツ輪交通自動車、東京大学、株式会社現代文化研究所の皆様には多大なるご助言、ご協力をいただきました。ここに、心より感謝申し上げます。